

**秘密結社の研究施設に
忍び込んだスパイが
捕まって調教の末快樂落ち
させられるお話**

大和ソウ

-story-

懷柔

墮落

敗北

蹂躪

恋う躰

漏水

独占

哀愁

記憶

懐柔

体に繫った鎖がジャラジャラと音を立てて動く。

パイプベッドに繫がれた私は蛍光灯が光る部屋の中で意識をなんとか起こし、この状況を打破することを考えた。

——絶対、暴いてやるんだから……。

この任務を引き受けた時、私は運命だと思った。

幼い頃私はある連中に攫われ、とある施設に連れて行かれた。そこには私と同じように、幼い子供たちが沢山集められていた。

冷たい部屋に閉じ込められ、一人また一人と子供が連れて行かれる。分厚い扉の奥から聞こえる断末魔が絶望を誘った。それがどれだけ恐ろしかったことか——
——。今でも思い出すと身震いする。

けれど偶然にも、私は警察に助けられ、施設から救い出された。そしてそれから年月が過ぎ……私はある組織の元で活動するスパイとなった。

この仕事を志したのは、幼い頃の体験が元だった。私のように辛い思いをする人たちを救いたかったから。

そんな私に、ある仕事が回ってきた。

秘密結社の研究施設から機密資料を取ってくる……それが今回の任務だった。そしてそれは偶然にも、私を幼い頃拉致したあの組織だった。

あの時は結局警察が現場に踏み込んだものの、組織の解体には至らなかったそうだ。多くの者は逃げ出し、そして今もあの残虐な行為を繰り返している。

だから私は迷わず引き受けた。

簡単ではないけれど、運命だと思った。なんとしてもやり遂げたいと思った。目的の研究施設は警備が手薄だと聞いていたし、一人でも十分対応できると思った。

油断はしていないつもりだったけれど……でも、最後の最後で私は罠にかかって捕まってしまった。

気が付いたらこの状態で、二進も三進もいなくなっている。

両腕と両足につけられた拘束具はベッドの柱につながっていて身動きが取れない。

この部屋はどこだろう。おそらく研究所の中だ。壁には灰色の棚が並び、よく分からぬ機械がいくつも置かれている。

部屋の扉がギイと金属音を立てて開く。そこから出て来たのは白衣を着た若い男だった。研究員らしからぬ高圧的な目に、なんだかつい見入ってしまう。

「随分間抜けなスパイだな。こんな初歩的な罠に引っかかったのか」

「……あなたは誰」

「ここの研究所の所長だ」

男はニヤリと笑った。男の不気味な笑みを見て、私は背筋がゾツとした。

捕まったスパイがどうなるかは今までの仕事で嫌という程理解している。これから自分がどうなるのか……それを考えると血も凍るようだった。

「さて、間拔けなスパイにどんな罰をくれてやろうか……」

「殺すなら一思いにやって」

今まで捕まった仲間達はひどい拷問にかけられた者もいたし、一瞬で殺された者もいた。直接見たわけではなかったけど……聞くに耐えないようなものばかりで、自分は絶対にそうはならないとそんな話を聞かたびに誓ったものだ。

だけど――。

迂闊なことにトラップに嵌まった私は電流をくらい気を失った。本当に間拔けだ。

「何を勘違いしているのか知らないが、俺は人殺しはしない」

「……気休めはやめて。私だつてずっとこの仕事をしてきたの。そんなこと言われたつて信じられない」

「人殺しなんて処理が面倒くさいことするかよ」

「じゃあ、どうするつもりよ」

「簡単だろ。ここは生物実験の研究所だぞ」

男の不気味な笑みの正体がわかった。思わず身体が強張る。

まさか切り刻まれて何かの実験台にされるのだろうか。想像しただけで吐きそう
だ。

「ま、そんな難しいことじゃない。耐えられるかは知らないがな」

「何を、する気なの……」

「お前みたいなタイプが一番落ちやすいんだ。じつとしてろ」

男は拘束具を付け替えて脚を大きく開かせるようにもう一つ別の拘束具を取り付けた。

脚の間に一本の棒を取り付ける。それは黒い服をまとった私の股間を見せつけるような形で開かされて、羞恥心を煽った。

「いやっ！ 何するのよ！」

「じつとしてろ」

男は上からジッパーを下ろし私の服を脱がせていく。乳房が露わになり、肌寒さに思わずぶるりと震える。

やがて一番下……股のところまでチャックを下ろし、秘部を露わにする。

人に見せたことのない茂みすら露出されて、私は羞恥に泣きそうになった。

「いや……お願い、やめて……」

「スパイが何言ってるんだ。こんなことぐらいで降伏するのか？」

「な、何をする気なの……」

「まあ、それはおいおい教えてやる」

男は露わになったそこをじいつと眺めた。何をするわけでもなく、ただ視姦する。

私は今から何をされるのかと恐怖に怯えた。普段は気が強い方だけど、まさか自分がこんなにも弱い精神の持ち主だとは思ってもみなかった。男が少し動いたたびにびくりと体が動く。

「そんなに酷い身体でもないし、まあ合格だな」

男は露わになった秘部に手を当てて、そこにあるひだを分けてその中心を見つめた。まるで触診されているようで顔から火が出そうだ。

顔をそこに近づけて、ピクピク動くクリトリスと収縮する膪を眺めている。

「ここには動物以外にも人間が大勢集められる。大概誘拐されてきた奴らか、身売りされてどうしようもない奴らだ。その大半は人体実験に使われるか、もの好きな金持ちに売り飛ばされる」

彼はぶつぶつ呟きながらカルテのようなものに書き込み始めた。

その間も私はずつと脚を広げたままで、いつになればこの辱めは終わるのかと待っしかなかった。

男はようやくカルテを閉じると、棚からガラスの筒のようなものと液体が入ったボトルを取り出した。ガラスの筒はそれほど長いものではない。筒の太さも、直径二センチほどだ。ボトルから筒に液体をだらりと垂らす。そしてその筒を断りなく私の膣にぐいっと押し込んだ。

「痛……つやめて！　そんなの入れないで！」

「お前のここの耐久性を測ってるんだ。いいから動くな。余計に痛くなるだけだ……ん？」

膣からわずかに血が流れて臀部へと伝っていく。中がジクジクと痛んだ。

「なんだ、処女だったのか？」

「う……うるさいわね！」

「フン、それならそれで開発しがいがある」

ガラスの筒の両端には穴が開いていて、男はそこにボトルを傾けて液体を流し込んだ。ひんやりとした物体が膣の中に流れ込んでくる。

じわじわとした痛みが段々と熱いものに変わってきて、下半身が熱を帯びていく。

「な、なにを入れたの……っ!?」

「ただの興奮剤だ」

「な……っ」

男はまた別の黒い拘束具を取り出した。膣に差し込まれたままの筒を抜き取ると、そこに拘束具をはめていく。

「ここにこれを入れてやる」

取り出されたのは小さな親指ほどの物体だ。何をするものかは分からない。短いコードと電源ボタンのようなものがついている。

その物体を下半身の、ちょうどクリトリスの真上に固定するように設置する。

男がニヤリと笑い、スイッチを入れた。

「いやあああああああ！」

小さな物体から激しい振動が伝わり私のクリトリスを刺激する。私は激しく体を振って逃れようとした。けれど逃れようにも器具が固定されていて、もがいてもどうにもならない。

「ローター一個ぐらいでよく喚くな。ま、改造したやつだから普通のよりは強めだが」

男は楽しそうにそれを横で眺めている。

「お願いいいっ！ 取ってえええ！」

「駄目だ。あと三時間はこのまま我慢しろ」

「いやあああつ！」

「三時間経ったらまた来てやる。それまでは気絶するなよ」

男はそう言つて部屋を後にした。

私はなんとか正気を保とうとした。けれど、どうにもならずローターに喘ぐしかない。

クリトリスにあてがわれるように固定されたバイブがブルブルと震えている姿が見える。感じたことのない快感に全身がガクガク震えた。こんなものを三時間も耐えられるわけではない。

時計も見えないこの部屋で、私は絶望しながら快感に声を上げ続けた。

予告通り、男はしばらくしてから部屋に現れた。

だけどその時には、私は快感に気絶しかけていた。いや、既に何度も気絶した後だった。

ローターは相変わらず延々と音を立てて振動しているけど、それに反応することもない。下半身はピクピク震え、秘部から液体をだらだらと垂れ流した。

「スパイの癖にだらしない女だな。おい、起きろ！」

男が私の尻をばちんと叩く。私は微かに目を開けた。そしてすぐにローターの快感にとらわれてしまう。

「いあああつ、お願い！　これをとつてえ！　またおかしくなるう！」

「相当派手にいきまくったな。床がびしゃびしゃだぞ」

「あああああつ！　お願いいいいっ！　もう、駄目えええ！」

「チッ、仕方ないな」

男は私の願い通りローターのスイッチを切った。

安心感からか、ぶるりと体が震えてまた膣から愛液が漏れる。横たわるベッドの上も、床も愛液まみれだ。

「まあ、予想通りだな。つたく、こんなに汚しやがつて……べとべとになっただろ」

「ああ……あ、ああ……」

男が拘束具を外していく。あらゆる場所がベトベトの汁まみれだ。陰毛も、ヒダも、尻の下まで濡れている。

私は快楽に侵されて、もう頭がまともに働いていなかった。ぼんやりして身体から力が抜けてしまっている。とても反撃できるような状態じゃない。

「ずいぶん汚れたからな。洗浄してやる」

男は柵の扉を開けた。カチャカチャと金属音を立てて、見たこともない器具を取り出していく。銀色をした金属のそれはくちばしのような形で、なにに使うのかはわからない。

男はそれを私の濡れた膣の中に滑り込ませた。ひやつとした感覚に腰が浮く。散々濡れたから痛くはないけど、冷たくて変な感覚だ。

最後まで入れると、くちばしについたネジを少しずつ開けていく。そうすると中のくちばしが段々と開いていくような感覚がした。

「これはクスコって道具だ。お前のマンコが丸見えだな」

「い、いやあつ……」

男は中を観察する様に、ペンライトを持ってその中を照らす。

「使ってないだけあつて中は綺麗だな。洗うからじつとしてろ」

そのままホースの先端に細い金属棒がついたようなものを取り出し、機械に取り付けた。スイッチを入れ、クスコの中にそれを少し入れると、そこから水のようなものが勢いよく噴射され、直接膣の中に水を注ぎ込まれる。

だけどすぐに水が溢れた。溢れた水がバシャバシャと尻を濡らしていく。

「あああああつ！ いやあああつ！ 入れないでえええ！」

「入れないと綺麗にならないだろ」

「あああつ、ナカが、ナカに水がはいっちゃうのお……っ」

「しつかり奥まで掃除してやらないとな」

それをクスコの中から抜くと、開かせたひだやクリトリスに当てる。敏感な部分に水が勢いよく当てられて身体が魚のように跳ねて身悶える。

「いやあああつ！　だめえええ！　おかしくなっちゃう！　おかしくなるうう！」

「洗わないと雑菌が溜まる。じつとしてろ」

固定されて動けないそこにビシャビシャと水が叩きつけられて、むき出しになったクリトリスは真っ赤に腫れた。

そんな事をされて平常心を保てることなどできるわけもない。

「ふん、白目向いてヨダレ垂らして……。情けない顔だな」

私が気絶しかけたところでようやく機械が止められた。

だが、洗い流したはずのそこからまた愛液が溢れている。男は指でかき出すように秘部をグチュグチュとこねくりまわす。

「洗ったのにまだ出るな」

「あ……ああ、もう、許して……お願い……」

「こんなに出たんじゃまた汚れるだろ。蓋してやらないとなあ？」

楽しげに笑うと、男はまた道具を取り出して、その先端をべろりと舐めた。

男性器を模した真つ黒なデイルド。しかも、とても大きな。

クスコをゆつくり抜き取ると、そこにデイルドの先端を当ててにゆるにゆると

擦った。これからそれを入れられると思うと中が疼く。

「こんな道具に処女を奪われて残念だったな」

「ああ……っ」

ぐちゅん！ と勢いよくそれを中に差し込まれる。例えようのない圧迫感と快感が押し寄せた。

差し込まれた黒いデイルドが拘束された股の間から見える。男がそれを抜き差ししている。私はまた快感に顔を歪めた。

「なんだ？　せつかく塞いでやってんのにまた漏らしてるぞ！　ダメマンコだな！」

「あうっ」

バシンと尻を叩き、デイルドをより一層奥にねじ込む。

けど、中に溜まった愛液は隙間から溢れてきて、ちっとも塞ぐ役目を果たしてくれない。

男は素早くそれを動かしてデイルドをギリギリまで引き抜いては膣奥に当たるほどねじ込むのを繰り返した。素早いピストンに腰が震えて快感に耐えきれない。

「あああああつ~~~~~つだめええええ！　イク！　イッチャうううう！」

「なんだ？　また漏らすのか」

「あああつ、だめ、もう、おかしくなるのおおつ！ 抜いてええ！！」

「駄目だ。スパイならもう少し耐えてみせろ」

「いやあ~~~~つ無理いい！ イク！ イツちゃう！ だめええええ！」

私は足をガクガクさせて激しい絶頂を迎えた。デイルドの間からは愛液が流れ、びちゃびちゃにそこを濡らす。

男は満足そうにそれを指ですくうと舌で舐めとった。

「また派手に漏らしたな」

「あ……あ……つ」

「しっかりと可愛がつてやるからな……淫乱スパイ」

私はぼんやりと男の顔を見つめた。もう、彼が何を言っているかよく分からない。

ただ、これからもこの拷問は続くのだとなんとなく理解した。

墜落

あれから男に淫猥な行為を何度も繰り返された。快楽の実験は、確実に私の精神を蝕んだ。

陰部を洗浄されては愛液で汚し、またそれを繰り返され、お仕置きされ、今ではもう、私の秘部はすっかりそれに慣らされていた。男が部屋に入ってくると膣が疼くほどだ。

だけど、精神的にはまだ彼を受け入れていなかった。そこは腐ってもスパイだ。そこまで落ちるわけにはいかない。

そして今日も、男は私を乱す。

バシン！ バシン！ と叩く音が部屋にこだまする。すっかり赤くなった私の臀部は度重なる男の「躰」に赤く腫れ上がっていた。

鞭で何度も叩かれて、私はその度痛みと快楽に嬌声をあげる。

「痛いっ！　お願い、やめてえっ……！」

「駄目だ、また床を汚しただろ」

「あああああっ！　いやあっ……っ！」・

四つん這いにさせられた私は臀部を、むき出しになった秘部をバシバシと叩かれる。

情けない格好で恥ずかしくて、痛いはずなのに、秘部からは愛液が漏れる。痛いはずなのに、なぜか快感を感じる。

「だらしないマンコのスパイには……しつかり罰を与えてやらないと、なっ」

「ああん！」

最後一発叩くと、男は部屋にあった大きな機械を持って来た。

機械にはキャスターがついている。だけど、私はそれを見た瞬間顔が引き攣った。

機械は簡単な構造だ。モーターの部分は箱状になっているが、外部に露出している部分には長い金属の棒。そしてその先端にはペニス型の物体がついている。

それを見ただけでこれからどうされるのか予想がついた。

男は四つん這いの格好をした私の真後ろにそれをセットすると、高さを調節してデイルドが膣に当たるように位置を変えた。

これからその長いものが膣に入ってくるのだと思うと、恐怖が湧く。なのに、また愛液が溢れてくる。

「これで突かれたら、お前もただじゃ済まないな」

「あ、そんなの……無理よ……耐えられない……っ」

「だから入れてやるんだろ」

「お願い、それだけは……それだけは入れないで……っ」

「じゃあ、お前に選択させてやる。この長いデイルドをマンコに突っ込まれるか、もつと極太のデイルドで拡張されるか、どっちがいい？」

「そんな……」

どちらにしても耐えきれないことは目に見えていた。

今用意されているデイルドも決して細くはないのに、これ以上、極太のデイルドなんて入れられたら膣が裂けてしまうかもしれない。それに、快感は比べ物にならないだろう。今のままでいいと答えるしかなかった。

「……決まりだな。ほら、尻を出せ」

「ひゃあっ……」

差し出した尻を開いて、濡れた蜜壺を露わにされる。そこにデイルドの先端をあてがうと、男は機械を起動させた。

ゆつくりと伸びてくるデイルドが膣内に侵入してくる。デイルドはシリコン製のようだ。にゆるにゆるとすんなり入っていき、ある程度のところでは機械が止められた。

私が行為に慣れてきたせいか、思いのほか痛むことはなかった。ただ、とても長い。

一突きで子宮にまで当たってしまいそうなほどの長さのデイルドだ。ある程度奥に入れたにもかかわらずまだその長さを持て余している。

「さて、動かすか……」

「あ……お願い、酷くしないで……」

唇が震える。そんなお願いを男が聞くわけないとわかっていたが、そう言わずにはいられなかった。長すぎるデイルドがどんな快感を自分に与えるかわかった。

「ちゃんとローションも流してやるから心配するな」

それなら———と思つたのは間違いだとすぐに気付いた。

「あ……いやあああ！」

男がスイッチを入れるとデイルドがゆつくりと動き始める。

単純なピストン運動のそれは、時折ぐねぐねとその姿を歪めながら私の膣内を蹂躪していく。

ジュポッ♡ジュポッ♡ジュポッ♡ジュポッ♡

男の言つた通り、デイルドの先端にはローションを流し込む穴が付いていたらしい。差し込む度にそこからローション液が漏れ出てきた。

「あ、ああ~~~~~っ！」

けどそれは少しの量ではない。大量だった。膣はローション液で溢れて、デイルドとの隙間からどぶどぶと漏れ出す。

大量に流し込まれているせいで、私はまるで水を直接注ぎ込まれているような気分になった。

「いやああああ〜〜！　だめええ！　それ以上入れないでえええ！　漏れちゃう！　漏れちゃうのおお〜〜！」

「だらしないマンコだな！　きつちり飲み込め！」

「そんなに入れられたらっ！　アソコから出ちゃう〜〜っ！」

ジュポジュポといやらしい音を立てながらデイルドが膣の中に高速で抜き差しを繰り返す。その間もローション液は噴射し続けていて、開いた秘部からだらだらと溢れた。

「初っ端から十五センチも入ってれば大したものだな」

既に何度も絶頂していたが、男が機械を止めてくれる気配はない。悠長にデイルドの長さを測っていた。

「もう少しいけそうだな。気絶するなよ」

男が機械のボタンを押すと、デイルドがより一層奥にねじ込まれた。

「ひいゝゝゝゝゝゝゝゝ」

子宮口まで届いたデイルドの先端が何度もそこを突く。私は仰け反って絶頂を繰り返す。

じゅこっ♡じゅこっ♡じゅこっ♡

「いやああああ♡だめゝゝゝゝゝ♡おかしくなる♡おかしくなっちゃうのおお♡」

「自分のマンコがどうなってるのか自分で説明してみろ！」

「んあああっ♡♡わ、わたしのおまんこがあああ、デイルドに責められてもうイチイそうなんですぅ……っ♡♡お願いいつ、ぬいてええ♡」

「ふん……お前が約束できるなら止めてやってもいいぞ。研究に協力して、従順に従うなら止めてやる」

「ああん♡そんなあつ♡」

「じゃなぎやこのままいきっぱなしだ。それでもいいのか？」

「いやああつ♡わかりましたあつ……お願い、協力するから……つ従うからこれを止めてええつ♡」

男はニヤリと笑うと機械のスイッチを触った。

だが、機械はより大きな音を立てて先ほどよりも深く膣の中にデイルドをねじ込んでいく。

「いやあああああ……♡」

私は白目を剥いて体を大きくのけぞらせると、その秘部からローションを吹き出して果てた。

力が抜けた上半身を床につけ、尻はガクガクと震えたままデイルドが挿入をくりかえす。

「ふん……堪え性のない女だな」

男は機械の動きを止め、ゆつくりとデイルドを抜き取った。

ジュポツと音を立てて抜かれると、中から注ぎ込まれたローションがとぷとぷと溢れてくる。男は膣の中に指を入れてローションを掻き出した。

「あ……♡ああ……あひっ……♡♡」

「よくこんなに入っただ。おかげで痛くなかっただろ。感謝するんだな」

掻き出すたびローションがいくらでも溢れてくる。デイルドによつて貫かれた穴はヒクヒクと痙攣し、残ったローションを断続的に吐き出し続けた。

「……また、洗ってやらないとな」

ぼんやりした視界の中、男が企んだように笑い、私の秘部をべろりと舐めとつたのが見えた。

敗北

男に服従する事を誓ってしまった私は、どうしようもない快楽の実験に毎日のように身を震わせることになった。

男は毎度私に機械を取り付け、何かのデータを取っているようだけど、詳しいことはわからない。

初めは生物実験の研究所だと聞いたから、てっきり切り刻まれたり拷問のような事をされるのだと思っていただけ……これも拷問とあまり変わらない。

気絶するほど毎日いじめられ、気がつくと絶頂していて、身体は力が出ないほど震えていることばかりだ。

それは、他のスパイのように任務に失敗して撃ち殺されたり、見せしめに酷い拷問を受けることに比べれば生かされている時点でマシなのかもしれないけど……こうして辱めを受けるのも同じことだ。

抵抗したところで無駄だとわかったからもう逃げようとも思わないけど、やはりいざ実験されようとする、快樂に耐えきれなくて逃げたくなる。

「大人しくしてたか？」

部屋に入ってきた男は、机の上に置かれた皿が空になっているのを確認した。私は部屋を与えられた。ベッドとテーブルがあるだけの簡素な部屋だ。ちなみに、鍵がついているから自由には出られない。

定期的に食事は与えられ、足枷はついていたけど両手は自由。それでも、少しだけ自由があるからマシなのかもしれない。

「今日は……何をするの」

「自分から聞くようになるとは、そんなに気になるか？」

「ちっ……違う！　そういうわけじゃ……」

私は即座に否定した。

別に彼のやることが気になったりはしない。聞いたところで何をされてもどうしようもないし、拒否権もない。

「来い」

男は鎖を引っ張って私を部屋の外に出した。全裸の私はよろよろと廊下を歩く。

ここは彼専用の研究エリアらしい。今だに誰とも会わない。

研究所はかなり広かったけど、彼の部屋は暗証番号が必要だから入るには許可が必要なだろう。

廊下を歩いて白い扉の中へ入る。最初いたあの部屋だ。もう何度も訪れている部屋。

私は何も言われずとも、診察台のような椅子の上に腰かけた。

クッションがついた椅子は私の脚を開かせるような構造になっていて、アソコが剥き出しになるよう見せる。

「今日は久々に面白い実験でもするか」

「面白い……？」

男は一本の注射器を取り出すと、それを私の乳首に近づけた。針の先端がそこに当たって、思わずびくりと体が動く。

「動くに変なところに刺さるぞ」

「あ……っ」

ぷすりとそれを乳首の先に突き刺すと、彼は中身をゆっくりと注入した。

二回に分けてそれをそれぞれの乳首に注ぐと、長いチューブの先に透明な器具がついた道具を取り出した。

それを機械に接続すると、チューブの先についたプラスチックのような部分を私の乳輪に取り付ける。なんだか牛の搾乳機みたいだ。

正直、それが何をするものなのかまだ分からなかった。恐ろしい快楽を与えるものだということはわかって……。

「な、何をするの……」

「このままじゃ出ないか……しょうがないな」

男は椅子を動かし、私の脚を大きく開かせた。剥き出しになった秘部に一本の金属棒を差し込んでいく。

ひんやりとしたそれは徐々に奥へ奥へと飲み込まれ、一番奥まで入った。

その金属の、露出した部分にクリップのようなものを取り付ける。同じように、クリトリスにも挟んだ。

そのクリップの先にはぐるぐると螺旋状に回るコードがついていて、それは別の機械に伸びている。

「多少衝撃が来るだろうが、じき良くなる」

「あつ——ひゃあつ！」

男が機械のスイッチを入れ、メーターを少しあげるとぴりりとした感覚が膕に響いた。それが電流だと、少しして気がつく。

軽く体を震わせた私は、自分の膕とクリトリスに付いたクリップを見つめた。

「今のは大した事なかっただろう」

「あ……これ、で、電気を流したの……？」

「その方が刺激が加わって出やすくなるからな。ホラ、もつと強くするぞ」

「いつ……ひああああつ！」

ビリビリした電流は男がスイッチを上げていくたびにその強さを増していく。

中に響く電流もだけど、クリトリスに流される電流は拷問以外の何者でもなかった。耐えきれないほどの快感に私は泣き叫び、次第にその声は涙声へと変わっていく。

「やあああつ！ おねがいいい！ おかしくなる！ おかしくなっちゃううう~~~~！」

「どうだ、少しは刺激になっただろ」

「ひああああッ！ だめ！ だめえ！ これ以上したら……っあああああつ」

「今度はこつちを弄ってやるか」

私の嬌声は無視し、男は乳首につながつた機械のスイッチを入れた。ウィーンと音を立てて機械が起動する。

機械のボタンを一つ押すと、私の両胸がブルブルと激しく揺さぶられた。きゅうきゅうとまるで吸い込むように乳首を吸引していく。

「アアン！ やだあつ、なに……っ!?」

私は驚いて目を見開いた。自分の乳首から、少量だけど母乳が出ていた。それは管を伝って、機械に吸い込まれていく。

「やつと出たか。まあ、こんなんじや足りないがな……」

「ンアアアつ、乳首が、おかしくなるのお……♡吸わないでえ~~~~♡いやあ~~~~♡」

「気持ちいいだろ。もつと強くしてやる」

「ああん♡やめてえええっ♡」

男はニヤリと笑うと下半身につながったクリップの電流を強めた。

快感が先程よりも強くなる。全身をガクガク震えて、頭が真っ白になりそうになった。

母乳は先程よりも大量にそこから吹き出し、吸い込み口に白い液体がたまってい
く。

「やだあっ♡いっぱいミルクが出てる〜〜っ♡♡私、おかしくなっちゃう♡」

「イイコだな。ちゃんと出てるぞ」

「アアアッ♡止めてえ♡乳首の機械とめてええっ♡」

「ん？ 電気の方はいいのか？」

「ふああああ♡どっちも♡どっちも止めてくださいいい♡」

「駄目だ、どっちなしか止めてやらない」

男は二つの機械の目盛りを一気に上げた。下半身に流れる電流は全身を流れる
ほど強くなり、乳輪に吸い付く機械はあまりにも強く吸い付くので乳首が真っ赤に
なつてまるで絞られているようだった。

「お願いしますうう♡止めてくださいっ♡ああああああ♡」

「どうするかな……じゃあ、このタンクが全部たまったら止めてやる」

「んあああああ♡いやああああ♡♡」

タンクには私が出した母乳が溜まっていく。けど、それが溜まり切るにはまだまだ時間がかかりそうだった。それが溜まるまで耐えるだけの精神力も体力も、私にはない。

「お願いしますうう♡♡あ、あん♡この機械をとめてええ♡♡♡」

「もっと可愛くおねだりしてみせろよ。そしたら止めてやらないでもない」

男は私の愉悦に歪みきった顔を恨みがましく睨みつけた。

顔は涙でぐしゃぐしゃに濡れて、舌はだらしなく口からはみ出す。スパイだった頃の面影はどこにもないかもしれない。けど、そんなことはもうどうでもよかった。

「あああああん♡♡私の……♡身体についての機械を、外してください♡♡♡」

「私の、イヤラシイ乳首とクリトリスとマンコについた、だ」

男の視線が私を見下ろした。考える間も無く、彼の言う通りに言うしかなかった。

「ヒイイ~~~~♡♡私のおっ♡イヤラシイ乳首と♡クリトリスと♡おまんこについた機械を外して下さいい~~~~♡んああああああ♡」

「イイコだ……ちゃんと言えたな」

男がスイッチをパチンと動かすと、乳首に吸い付く機械がより一層強くそこから母乳を搾り取っていく。

甲高い嬌声のあと、タンクに溜まる母乳が数目盛り上がった。

しばらくしてタンクが溜まったのを確認して、男はスイッチを切った。

まだぶるぶると震えている私の胸から吸い付いた透明な器具を引つ張ると、キュポンと音を立てて乳輪から離れる。強い力で吸い付いていたそこは、あまりの力に紫色に腫れ上がっていた。

男は乳首の先からちろちろと漏れ出た母乳を舌先ですくい取った。それを舐めると満足そうな表情を浮かべる。

「……聞こえてないか」

秘部に突き刺さった金属棒を抜き、クリトリスについたクリップを外す。そこからは愛液が溢れて、椅子を汁まみれにしていた。

「またこんなに濡らしたな……相変わらず駄目マンコだな」

私はぼんやりと男の声を聞いた。けれど反応する力もなく、未だに身体を蝕む快樂に身を震わせ、虚ろな目で宙を見つめているだけだった。

蹂躪

天井から吊るされた紐は博士に向かって脚を広げるように私の手と足に伸びている。

開かされたそこに博士は太い鞭を何度も当てて、その度に私は嬌声をあげて秘部から愛液を漏らす。ポタポタと落ちた愛液が床にシミを作り水溜りとなつていく。

「やああっ……痛い……っ博士……お願い、やめて……っ」

「何がやめてだ。こんなにダラダラ涎垂らして」

「あうう！」

バシン！ と音を立てて鞭が飛ぶ。

クリトリスに当たるように飛んだ鞭の先は私の愛液でビショビショになつていった。

大きく胸を上下させて荒い息を貪る。疲労と、快楽で意識が飛んでしまいそう
だ。

「お前を起こすとしておきの道具でも使つてやろうか？」

「あ……」

博士が取り出したのは、見覚えのあるものだった。スパイだった時に持っていた
マグナムだ。捕まった時に没収されてしまったもの。

博士はその先端をべろりと舐めると、銃口を私に向けた。

「な、何をするの……っ」

さすがの私も意識がハッキリして、目を見開いた。博士の顔が愉しそうに歪み、
私に近づく。

恐怖が募り、死を予感して先ほどまで快楽に震えていた身体を強張らせた。

「この中には弾が一発だけ入ってる。俺は三回引き金を引く。弾が出なかったらお前の勝ち。弾が出たら……」

ロシアンルーレットのようなやり取りは、博士が言うような楽しいものではない。死を賭けた罰ゲームだ。

勝ちだ負けだなんて楽しむ余裕は私には無かった。

博士は銃口を私の秘部にくちゅくちゅとねじ込んでいく。愛液で濡れたそこに、マグナムの先端はすんなりと入った。

けれど、快楽に酔うことなどできなかった。下半身は、快楽のそれとは別のもので震えている。引き金に添えられた博士の指が動かないか、固唾を飲んで見つめた。

「じゃあ、一発目……」

「いやあああーっ！」

「ひいつ！」

博士に脅されて私は暴れる身体を瞬時に止めた。間違えて撃ってしまえばそれこそお陀仏だ。

もう一度博士の指が引き金にかかる。

「最後の一発だ……」

「あ、あああ……」

カチッと、音がした。

引き金を引いて少ししてから、博士は残念そうに溜息をつく。

「ハズレ、か。お前の勝ちだな」

「あ、ああっ……」

ジョロロロ……と音がして、私の股の間から薄黄色い液体が吹き出た。それは床にどンドン溜まり、大きな水溜りとなっていく。

私は呆然と、口を半開きにしてしばらくの間その液体を流し続けた。

「お前……漏らしたな？」

「は……ひい……っ」

「こんなに出して……」

膣に入れられたままのマグナムをズポツと抜くと、またそこから尿が吹き出す。私は下半身を震わせたまま、足の間からポタポタと尿を垂らした。

—— ああ……♡わたし、おもらし、しちゃった……♡

正気ではいらなかった。恐ろしくて、恐怖で感覚がない。足に力が入らない。「ダメなスパイだな。任務失敗して、拳銃にマンコに銃を突っ込まれてお漏らしか。オラ、ダメマンコ！」

「ヒイイッ！」

じゅぽっ！

マグナムを再び膣にねじ込んで、博士はそれでピストンを繰り返した。

びしょびしょに濡れたそこに何度も銃口を往復させて、私はまた撃たれるかもしれないという恐怖と、お漏らしをしてしまった恥辱に占領され、普段なら言わないであろう言葉を口走る。

「ちゃんと報告しないと、私のマンコはお漏らししてたくさんオシッコを漏らししました。ごめんなさいってな。ほら、言えよ」

「ひああつ、ご、ごめんなさいい~~~~~っ♡私のマンコは……っ♡お漏らしを、してえ！　たくさんオシッコを漏らしちゃいましたあ♡ごめんなしい~~~~~っ

♡」

私はべそべそ泣きながら足を広げ、懇願した。

「イイ子だ。じゃあ、お仕置きにもっとお漏らしさせてやる」

「ひやああっ♡♡」

じゅぽん！ と銃を引き抜くと、博士は私の下に大きな機械に取り付けられた
デイルドを用意した。

丁度、真上を向くように設置されたデイルドが私の秘部に向けられる。

博士はスイッチを入れてそれをギリギリ私の膣に当たるか当たらないかの位置
まで上げた。

「これでたくさん突いてやるから、ちゃんとしっかりお漏らしするんだぞ？」

「あああ……そんなあ……っ♡」

「全部出さないとまた漏らすからな」

博士がスイッチを入れて、デイルドを動かした。

ゆつくりと私の膣に挿入されたデイルドは、愛液と尿にまみれたそこにぬるぬ
ると出し入れを繰り返す。パツクリと開いた膣が太いデイルドを飲み込んでいく。

デュポツデュポツと淫猥な音を立てて私の膣から愛液が飛び散る。

下から突かれる感覚は、横になっている時にされるそれとは比べ物にならない。それこそ、子宮までデイルドの先端が突きつけられて、私は漏らすどころでは無かった。

「ひあああ♡はひいああ~~~~~♡イク♡イツちやいますう~~~~~♡」

「出そうかよ！ オラ！」

「ひやあああ♡らめええつ、オシッコ出ちやう~~~~~♡博士しやあ、出ちやう♡オシッコ出ちやいますう♡」

「しつかり出せよ！ 見ててやる！」

「あひいひい~~~~~♡出るう~~~~~♡オシッコ漏らしちやううう~~~~~♡♡」

ぷしやああああつ♡

派手な水音を立てて、私の尿道から黄色い液体が飛び出した。

博士の白衣に向けてびちゃびちゃと飛んで、白衣が瞬く間に黄色く染まっ
てく。

その間もデイルドは止まることなく膣を突き続けた。

私は終わらない快感に、じよろじよろと残尿を吐き出し、身体を痙攣させてイキ
続けた。

「ちゃんとお漏らし出来たな」

「ひゃい……♡あ、私……おもらひ、ひひやった……♡ああ……♡」

「お漏らしした後は、ちゃんと洗ってやるからな」

「あああ……♡ひゃい♡たくしゃん、洗ってくだひゃい……♡」

快楽と恥辱で精神が崩壊した私は、ほとんど博士に服従していた。彼がするこ
とを受け入れ、快楽に身を任せた。何度も身体を蹂躪されながら……。

恋う躰

私は恍惚とした表情で身悶えた。

尻を高く持ち上げた状態で四つん這いにされて、その尻穴と膣には両方バイブが挿入されている。

「どうだ、新しい玩具の使い心地は？」

「は、はいい……♡すごく、気持ちいい、です……っ♡」

そこから愛液を漏らしながら私は舌を出して喜んで見せた。

淫具によつて拡張されたそこにはありとあらゆる道具が詰め込まれ、今では大概のものはすんなりと入る。

博士はバイブの先端を握りそれをゆるやかに前後させた。

連球のついたそれをジュブジュブと音を立てて抜き差しすると、私は爪先までのけぞらせて痙攣した。

「あんっ……♡博士、も……もつと早くおねがいします……っ♡」

「早く、どうして欲しいんだ？」

「オモチャをもつと……お前のおまんこに、いっぱい挿してえ……♡」

「こうかつ！」

「ひあああん♡きもちいい♡」

博士が勢いをつけて素早くそれをピストンする。私はさらに尻を開くようにしてバイブを受け入れた。そこからばしやばしやと潮が吹き出て、台の上を濡らす。

今はもう、拘束具をつけなくても実験から逃げようとしなかった。博士が使う薬のせいか、それとも私の精神が犯されてしまったからなのか。

わからない。でも、もうそんなことどうでもよかった。博士の目的さえも――

。

「淫乱なマンコとケツだな。ヨダレが出てるぞっ！」

デュポツ♡♡

「はひいつ♡ごめんなさい♡気持ちよくて出ちやうのおっ♡♡」

「また洗わないといけないな」

デュポツと音を立てて淫具を引き抜くと、博士はホースを取り出して機械に取り付けた。

私を仰向けにしてその先端をそれぞれ私の膣とアナルに入れると、機械のスイッチを入れる。

機械音がする。ホースから冷たい液体が流れ込み、ゆつくりとナカを満たしてゆく。

「は、博士え……っお腹、冷たいっ……♡」

「今中を洗浄してるんだ。じつとしてろ」

「は、ひいひい……♡」